The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	韓国国立中央図書館蔵『鷹鶻方　全』（古古７－３０－４４）全文翻刻
Author(s)	二本松, 泰子
Citation	日本語・日本文化. 2013, 39, p. 21-51
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/50768
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

〈研究ノート〉

韓国国立中央図書館蔵『鷹鶻方 全』（古古7-30-44）全文翻刻

二本松　泰子

一　はじめに

朝鮮で制作された鷹書である『鷹鶻方』は、高麗時代～李王朝時代にかけて複数の異本が制作され、日本にも多くの諸本が伝来したことが知られている。そのような『鷹鶻方』に関する先学の研究は、『放鷹』「朝鮮放鷹史」の第二編「朝鮮の文獻に現はれたる鷹の名稱」「附、引用文獻」[1]・田川孝三氏『李朝貢納制の研究』第一章「附・安平大君李瑢著鷹鶻方について」[2]、村戸弥生氏「朝鮮時代放鷹史・鷹書研究アプローチのための予備ノート」[3]、拙稿「『鷹鶻方』享受の一斑―韓国国立中央図書館蔵『鷹鶻方 全』（古古7-30-44）の奥書をめぐって」[4]などがある。

このうち田川氏論文によると、『鷹鶻方』の異本の種類は以下のように分類される。

①李兆年編とされる『高麗古本鷹鶻方』（14世紀成立）。

②李瑢編とされる『古本鷹鶻方』（15世紀成立）。

③李燭編とされる『新増鷹鶻方』（16世紀成立）。

『放鷹』と田川氏論文によると、右掲の①『高麗古本鷹鶻方』は林羅山と朝鮮通信使である金世濂との問答を記載

した『海槎録』や李圭景（李氏朝鮮第二四代国王憲宗時代、在位期間一八三四年～一八四九年）編『五洲衍文長箋散稿』に「星山李兆年」著の『鷹鶻方』のあることが指摘されている。しかし、現存する伝本には、書中には李王朝時代にまで下るとおぼしき諺文が見えることから、高麗時代の李兆年の著書そのものかどうかは疑わしいとする。田川氏はまた、右掲三種の『鷹鶻方』の本文を比較して③『新増鷹鶻方』は②の『古本鷹鶻方』を「増補」したものと判じている。

ところで、右掲①～③の『鷹鶻方』のうち、日本に伝来したとされているのは②『古本鷹鶻方』と③『新増鷹鶻方』である。そのうち、より多くの伝本が流布したのは③『新増鷹鶻方』で、件の林羅山も訓点や送り仮名を付したテキストを所持していた（国立公文書館内閣文庫蔵『新増鷹鶻方』（函号三〇六－三〇七））。同書は膨大な数の伝本が全国的に展開し、国字解などの注釈テキストも多数制作された。[5] 一方の②『古本鷹鶻方』は、③『新増鷹鶻方』が原拠としたテキストとされるにも関わらず、現存が確認できるのは以下の三本の和書のみである。ちなみに、朝鮮書の『古本鷹鶻方』は管見において確認できなかった。

- 韓国国立中央図書館蔵『鷹鶻方 全』（古古7－30－44）
- 宮内庁書陵部蔵『古本鷹鶻方 全』（函号163－1085）
- 国立公文書館内閣文庫蔵『古本鷹鶻方』（函号306－312）

このうち先の田川孝三氏論文が紹介している『古本鷹鶻方』の伝本は、宮内庁書陵部と内閣文庫に所蔵されている二本のみで、韓国国立中央図書館蔵『鷹鶻方 全』については全く触れていない。あるいはその存在を知らなかったのかもしれない。しかしながら、韓国国立中央図書館本の奥書には他の二本と比較して書写（転写）に関する情報がより詳しく記載されている。すでに稿者は、その記載情報を検討して『古本鷹鶻方』の享受の一斑を明らかにした。[6]

すなわち、同書は我が国において江戸時代前期（承応年間）～後期（天保年間）に「鷹匠」もしくはそれと所縁深い人物たちに限定して伝来されたものらしく、近世期の鷹匠たちが独自のコミュニティを有していたことを窺わせしめることを検証したのである。このように同伝本には、当時の鷹匠たちによる鷹書を介した放鷹文化の伝播の在り方を示唆する情報や、我が国における朝鮮放鷹文化受容の実態を明らかにする様々な手掛かりが記載されている。

そこで本稿では、現存する『古本鷹鶻方』の伝本の中から、韓国国立中央図書館蔵本の全文を掲出する。このような我が国に伝来した朝鮮の鷹書について、その奥書に見える識語を含む全容を紹介することによって、いずれ日韓放鷹文化史を明らかにする手だてとなることを期するものである。

二　『古本鷹鶻方』の諸本

前節で紹介した『古本鷹鶻方』の伝本は、写し間違いとおぼしい数か所の異同を除き、三本ともほぼ同文となっている。ただし、各丁における行数や行ごとの字配りについては宮内庁書陵部蔵本と国立公文書館内閣文庫蔵本は一致しているが、韓国国立中央図書館蔵本は異なった体裁となっている。

一方、頭注については、宮内庁書陵部蔵本と韓国国立中央図書館蔵本がきわめて近い文言を記載しているが、内閣文庫本は異同を見せる。そもそも宮内庁書陵部蔵本と韓国国立中央図書館蔵本には合計20項目以上の頭注が記載されているのに対して、国立公文書館内閣文庫本の頭注は2項目しか記載されていない。

各伝本の書誌については以下のとおり。

○韓国国立中央図書館蔵『鷹鶻方　全』

所　蔵　韓国国立中央図書館。古古7-30-44。

巻　数　一巻。
外　題　表紙左肩に「鷹鶻方 全」と記す貼題簽。
丁　数　一七丁。
行　数　半葉一〇行無罫。訓点付き漢文。
蔵書印等　表紙見返部分に楕円形の受け入れ印「朝鮮総督府図書館、図書登録番号」（楕円の中に「昭和12. 4. 15」「古 133323」と記載）他2つの押印。一丁表に「雑司谷片山賢」他2つの蔵書印。
奥書等　一六丁表に「右古本鷹鶻方雖多不審依无類本／不能校合只任本書訖　通堯」。一六丁裏に「彰考館御本奥書／右一者以二山一本藤一右一衛一門所持本一令二書寫／校一合一畢　承應三甲午年六月六日／古本鷹鶻方以二水戸彰考館御本書寫／之一天保四年五月廿六日／史館待命　平小山田與清」。一七丁表に「右此一帖者以一平與清小山田将曹自筆／本一於東武邸舎手自下　翰　書二寫之一畢／天一保四年歳次癸巳仲秋下瀚日／正木治部越智宿禰通堯（花押）」。一七丁裏に「右古本鷹鶻方者以正木通堯手書本謄／寫畢天保四癸巳之秋九月廿八日起筆／十月五日終巻馴鷹繋務之間連夜務下／採毫成功畢通堯者近江彦根之家士也／善國学側耽探鷹書頃日奉主命来江戸／舘而勤仕余有邂逅者而交情密也固得／借此書寫焉／雑司谷鷹人　片山勇八賢（花押）」。

○宮内庁書陵部蔵『古本鷹鶻方 全』
所　蔵　宮内庁書陵部。函号一六三－一〇八五。
巻　数　一巻。
外　題　表紙左肩に「古本 鷹鶻方 全」と記す貼題簽。
内　題　表の遊紙左肩に「古本鷹鶻方 完」の墨書。

寸　法　縦23.5糎×横16.5糎
丁　数　二七丁。表裏に遊紙各一丁。
行　数　半葉七行無罫。訓点付き漢文。
蔵書印等　一丁表に縦4糎×横4糎「宮内省圖書」の蔵書印。裏の遊紙に縦4.5糎×横2糎「昭和3年12月　伯爵松平直亮寄贈」の受け入れ印。
奥書等　二七丁表に「彰考舘御本奥書／右者以山本藤右衛門所持本／令書寫校合畢／承應三甲午年／六月六日／古本鷹鶻方以水戸彰考舘御本／書寫之天保四年五月廿六日／史舘待命／平小山田與清」。

○国立公文書館内閣文庫蔵『古本鷹鶻方』
所　蔵　国立公文書館。函号三〇六－三一二。
巻　数　一巻。
外　題　表紙左肩にウチツケ書きで「古本鷹鶻方」。
内　題　表遊紙左肩に「古本鷹鶻方」の墨書。
寸　法　縦23糎×横16糎
丁　数　二七丁。表裏に遊紙各一丁。
行　数　半葉七行無罫。訓点付き漢文。
蔵書印等　表紙右下に縦7糎×横2糎「新宮城書蔵」の蔵書印。一丁表に縦3.8糎×横3.8糎「日本政府圖書」、縦3.8糎×横3.8糎「圖書之文庫」、3.8糎×3.8糎「内閣文庫」、縦7糎×横2糎「新宮城書蔵」の蔵書印、「明治十六年購求」の受け入れ印。二六丁裏に縦3.8糎×横3.8糎「圖書之文庫」の蔵書印。
奥書等　二七丁表に「彰考舘御本奥書／右者以山本藤右衛門所持本／令書寫校合畢／承應三甲午年／六月六日／古

本鷹鶻方以水戸影考舘御本／書寫之天保四年五月廿六日／史舘待命／平小山田與清」。

注

（1）『放鷹』（宮内省式部職編、一九三一年一二月、吉川弘文館、二〇一〇年六月新装復刻）。

（2）田川孝三氏『李朝貢納制の研究』（東洋文庫刊、一九六四年、初出「李朝の鷹房と鷹子進上」『朝鮮学報』一四、一九五九年一〇月）。

（3）鷹書研究会第一一回例会口頭発表、二〇一〇年七月一〇日。

（4）二本松泰子「『鷹鶻方』享受の一斑―韓国国立中央図書館蔵『鷹鶻方 全』（古古7-30-44）の奥書をめぐって―」（『鷹書類の調査と研究』所収、平成20年～平成23年度、科学研究費補助金（基盤研究C）研究課題番号20520189）

（5）注（4）に同じ。

（6）注（4）に同じ。

【凡例】

一　翻刻は韓国国立中央図書館蔵『鷹鶻方 全』（古古7-30-44）によった。

一　翻刻に関しては、できるかぎり原文に忠実になるようにつとめ、改行は原本に従った。

一　改丁は」をもって示し、（一オ）のように丁数ならびに表裏を示した。

一　字体は出来るだけ底本の表記を重んじるように心がけたが、異体字など、一部通行の字体に改めたところもある。

一　花押は（花押）とし、その形態は示さなかった。

一　頭注については、本文の該当部分に算数字を付し、それに対応する注の文言を一括して本稿の末尾に記載した。

【本文】

鷹鶻方序

張一九一齡云鷹也者名揚二於尚父一義見二於詩一

鶻也者跡隠二於古人一史闕二其載一豈昔之多

識物亦有二遺以一此観之鶻之名始見唐矣

夫鳥之鷙者其類有二一曰鷹曰鶻其黄一鷹

白一鷹角一鷹鷂一子青一鸇乃鷹之類也其鴉一鶻

兔一鶻燕一鶻海一青籠一奪黄一鸇乃鶻之數也凡

此鷹一鶻非二特玩形一所三以資二之鳥一數一也攀雲

以二撃鳥之力一以爲娯故自古及今王一公大一

人莫不愛之必窮一崖谿一壑之險費二羅網之一一オ

巧一然一後可得及二其調養一法亦有具畫不離

手夜當二保一護一其勤如此猶且失二其節一常而

疾病易生或至掃群所謂鷹者尤一甚焉古

今之人曾無二攻一治之術一其得之也難其養

之也勤而及二其生一病也拱手待斃而不能

救也余竊恨レ之観二其飲一啄之勢一察二其肥瘦之候一以尋二生レ病之根一爰将二本草一因二其薬性一隨レ證治レ之無レ不二立効一遂著爲レ方大一抵調二一養鷹一鶻一之術皆出二於戯一玩一雖二君子之不屑一然或留二意於鷹一鶻一者観レ此有三以得二其備レ急云」一ウ

正統甲子(一)獵月暇日書二于匪懈堂之梅竹軒一

教二鷹鶻一名

○黄一鷹加之乙介。教ワ二之雉鴨一。白鷹投伊毘。教二之雉鴨一。甫加乙者。白木鷹。教二之雉鳶鴨一○角一鷹召鶻教二之雉兎一○鷂子結外。教二之鶉鵲一○青鸇非耶下。教二之鶉雀一○鴉鶻羅親。教二之鵝鳶鶴鶴一○兎一鶻盖加耳。教二之雉兎一○兎一燕々一鶻者于非耶下。無レ教而有レ名○籠一奪都弄太。教三之鶉與二鶬鷓一○黄鸇具只乃。亦無レ教而有レ名○海青松鶻。無レ所レ不レ教而至下於有二中折一鵬雛一者上

昔楚文一王好レ獵有下人献二奇一鳥一者上是謂二海青一」二オ

爲二獵於夢澤一毛群羽族爭噬競搏此鳥瞪二
目雲一際一無二搏噬之志一王謂二献一者一曰汝將レ欺
レ余耶答曰若效二於雉一兔一臣豈敢献俄而雲一
際有レ物鮮白不レ辨二其形一此鳥便聳レ翅而昇
失二其所處一須曳毛墮若レ雪血一下如レ雨有二大
鳥一墜レ地度二其両翅一其大數一里衆莫二能識一有二
博物君子一曰此大鵬雛也由レ此観レ之無レ所
レ不レ教亦有レ拠也籠一奪教三之鶉與二鶺鴒一黄鸝
亦無レ教而有レ名凡鷹一鶻所レ教大率若レ此耳
不レ須二以名定一也且教レ之術備二於時人所一為一二ウ
傳習已久不三必更立二他法一

用レ薬法

夫鷹鶻本有二凌霄之気一而見レ屈二於人一飢則
隨レ人飽則揚去故其生レ病也率皆傷レ心迫
レ情怯勞内一熱調保有レ違失二其本性一耳作レ食
當一細切一而不レ麁可之也鷹鶻有二蝨子一用二草柤

湯(2)ヲ一令レ浴セ焉又以テ二梨蔓根(3)ヒヤクブノ二味ノ・爲レ末マツト

加テ二輕粉フン黄連ヲ一細ニスリ研ツミテカヘハ肉ニ一裹ツヽミ飼レ之ヲ絶ヲハタ一妙ノ亦用ヒ水

銀ヲ一散ス一　○鷹鶻ノウチニ尿ヲ有ラハ二長ナカキ一虫ムシ一以テ二狼牙草ラウケ(4)ノ一煎センメ一レ水ニ

灌ソヽキ一下ス或ハ細シテ一末マツ和シテ食ス　○鷹ラハ一鶻有ラハ二傷ヤフル一毀ソコナヒ處ヤフル一用テ二」三オ

輕粉松脂ヲ一塗ヌル之ヲ待テ成スヲ一痂ヲ去テ一痂ヲ復タ用テ二童便ヲ小児

尿也塗ル之ヲ令レ不ラ成ス一痂ヲ如ハ或ハ足ヲ一脚浮腫ハレ用テ二火ヲ一鐵テツ一

針ハリ之レ且ツマタ納モクサノ二艾キヲ気シム一　○鷹鶻モンノ若ハ有テ内冷外熱

所レ尿シスル成スレ塊クワイヲ(5)ハン白礬カタマリ二青緑ニ一者ハ用テ二甘草タウ湯ヲ一和マツル食ユニ雖トモ

レ無シ二甘草タウ湯ヲ一用テ二温水ヲ一無シ妨サマタケレ　○鷹鶻モンノ如ハ有テ失ヲ二

其ノ節フシ一常ツネ飲食ヲ不ラ調トヽノハ或ハ吐ハキレ食ヲ或ハ遅タクタン下ス或ハ所シスル尿

溷濁コンダク或ハ身端激熱ハケンカラウ促ソク息ソク漲チヤウ気キ困コン倦クワンタ多スイモク睡目

晴セイ不ラ厲ハケンカラウ羽毛ボウ不ス快カラ凡ソ(7)ノ百ヒヤク病ヤマヒ證ショウ皆ミナ以テ二龍脳ノウ圓エン

黄ワウ連レン散サンシヤカン煮シヤ肝カン圓エンヲ・治ス之ヲ龍脳ノウ圓エン爲レ妙ナリ之ヲト　○鷹

鶻モン若ハ有テ促ソク息ソク漲チヤウ気キ鼻ハナ塞サカリ而シカルニ目メニ有ル涙ナミダ者ノニハ以テ二朱シユ」三ウ

砂シヤ散サン吹フキ二納イル鼻ハナノ一中ウチニ・亦タ用ヒ二龍脳ノウ圓エン一此ノ薬モ尤ハ宜シ二於

鶻ニ・若シ無シ二朱シユ砂シヤ散サン・以テ二皂角サウカク湯ヲ一代ヒテ之ニ　○鷹鶻

如或為レ物所レ觸目晴迷眩　而勢急　者　用二當
歸散一若不レ得二當歸散一人ー屎潅レ口　爲レ妙　○鷹
鶻凡有二不安之證一當レ忌三鵝與二白雞黄狗肉一
凡用レ藥多少宣レ隨二鷹之大小一

剤藥法

●龍ー腦ー圓　龍ー腦半錢研　大ー黄五ー錢　人ー参三ー錢　右三ー味内除二龍腦一外合
為二細末一入二龍ー腦一令レ均滴レ水作レ丸如二赤ー小豆大一以金箔一為レ衣毎ー服二ー丸
●朱ー砂ー散　朱ー砂雄ー黄各一ー錢研麝香半錢研三稜二錢雞爪者山茨菰千金」四オ
子大戟各一ー錢半　右七ー味内除二朱砂。雄黄。麝香一別研外合　為二細末一入二研藥一
令レ均以二葦管子一盛レ藥小許吹二ー入鼻中一
●皀角散　皀角半錢水半鐘煎　待レ冷入レ鼻令レ搐レ之
●煮肝圓　胡黄連去レ鬚大ー黄蒲ー黄黄ー栢去二麁皮一人ー参去レ芦苦ー参　右七
味各量二四ー錢一除二蒲黄一外ー合為二細末一入二蒲黄一令レ均納二猪肝内一以竹葉一包裹用
童便一煮熟去レ肝取レ藥爲丸如二赤小豆大一毎ー服三ー丸漸加至二五丸一
●當歸散　當ー歸一ー錢大ー黄二ー錢　右二ー味咬ー咀用二童便一煎去レ滓待レ冷潅下
●黄連散　黄ー連大ー黄蒲ー黄黄ー栢人ー参　右五ー味各量二一錢一咬ー咀都作二一

服ニ用ニ并ー花ー水一小鐘一煎　至ニ半鐘一去レ滓待レ冷潅下

●水銀散　水ー銀半ー銭輕ー粉麝ー香各一銭　右合研不レ見ニ水ー銀ー星ニ為レ度搽ニ有一四ウ

蝕處一

歳在ニ壬戌一冬有ニ鴉ー鶻善ー才者一一ー日　鼻息塞

急目ニ有ニ露ー涙時人ー皆以爲ニ項ー溺一欲レ灸レ之レ余

以ー爲鷹ー鶻不レ可下以ニ人病一治レ之試以ニ朱ー砂ー散一

吹レ之且用ニ煮肝ー圓一果有ニ神效一至レ今存焉厥

後余得ニ白ー黄ー鷹一甚愛レ之是ー時鷹ー病方興一ー

洞之内如レ掃無レ遺一ー日此鷹果有ニ退ー食激ー

熱之證一人皆曰當避方置之余於レ是用ニ龍ー

脳ー丸一獨此ー鷹存焉又今ー年秋之在ニ桝水一也

鷹事方盛競ニ誇其能ー將ニ還鷹ー病亦興生ー者」五オ

十常一二余ー之所レ養有レ七病ー勢已ー兆時一無ニ

他妙ー薬一止以ニ黄ー連ー散一理レ之及ニ其還一也六ー鷹

無レ恙而唯一ー鷹凍ー死ー耳余ー之所レ驗頗ー多姑

擧ニ數ー條明ニ其用レ薬之妙一觀レ此者足ニ以取レ證

焉之養鷹之方矣　○時人教鷹

吐鷹調習法

吐ー鷹初　捉則悪レ人怯ー勞内ー熱煩渇須三即勧レ水坐二于無人暗ー昧涼所一飼レ食時人潜入不レ令二鷹驚ー動一勧レ食則鷹甘ー食矣

新ー鷹畏レ人數飛勿二急ー速拳持一須下待二一ー三ー日一」五ウ

後夜則拳也之然不二徹夜拳持一日久漸々晝夜不レ離レ手坐レ架則必二人ー衆多處一

吐鷹捉則本肥不レ下而調習不レ厭レ人則初引レ食自レ近而呼日漸遠引不レ然而初據二遠引一則雖レ来不レ直而到二其習一常不レ可レ棄矣

凡新ー鷹畏レ人怯労服レ食後不レ可二拳持一也須二下レ食後拳レ之

観二鷹ノ之柔順従レ人引レ食服布レ塊耶塊耶則内ー陋有レ油疑結布二羽中作食一内庁裏而飼レ之則翌暁還吐レ之則去レ麁内清布則爲レ妙」六オ

越二六七日一二三度及二水食一肥得一中須二二三
日登レ山拳持一而引頸省聲見二飛雉則垂手
下一及放

新鷹放教法

拳二新一鷹一者日将レ暮矣見二當レ入近飛一好一手放
レ之得レ捉則勿二急一速直一進一此恐鷹之驚惶棄
去也作レ聲呼レ之須■下待二甘一食一而一後一遮一面回一歩
漸進到二鷹一處一先執二結一足一貫長■一皮上此慮二鷹
之颺一去一也雉腰折一殺除二熱一血茎一肉及内一肉一
并餵半一食一餘許而一後浮取其浮一取之法「人」六ウ
之手執指納二鷹之兩一脚一間一二一三指并執二兩一
脚一則自一然而解也或曰鷹熱一物雖レ調二鷹労
際一不レ可レ服二温食一況新一鷹畏レ人内一怯之気未
殄其心煩一熱其可服二熱一食熱一血一乎必少噬二
都邑支端肉一而浮取俄而気歇其雉温一肉
更飼二半一食一餘許一可之也

凡鷹不レ可二多放疲労一新一鷹尤可レ慎也　初放
之日與二二一三一日不レ過二一一手一五一六一日二一手至二
一朔一母レ過二三手一小一放為レ妙熱時則不レ拘二手一數一
粗知二鷹一理一者　此際須二毎一日捉レ食為レ妙若問」七オ
断放捉時生レ病矣又云暮手須二捉而甘食一則
其鷹暮必力捉此言似二乎巧一然雖二老鷹一終
日放時一則労レ身内一渇熱一気常多當二此之時一恣
服時二熱一食熱一血一則因二温合集一必遅一下生レ病矣
慎レ之慎レ之
凡鷹放使之日鷹一性本一柔而痩時一則飼二半一食
可之也本性悪而肌肥時則飼二二一三一點一可之也
凡性一悪一鷹登レ山欲レ放レ之時専不レ向レ心人一尿
和食■二一三一點可也又捉二雉于空中一堕レ地内
傷亦用為レ妙鶻一同」七ウ
凡鷹春一秋下一肥無レ害冬一月極一寒不レ可二上一肥」
雖レ然過一肥時則不可之性一悪一鷹大一肥時則有二颺一去

之志一量宣レ飼レ之

凡鷹多放則知三主之不二飽一飼一或貪捉或選

雌一雄一此一則知二雄一雄之力一強也故以二雄一雄一爲

レ食呼一引飼而教レ之

上レ木不レ下鷹一呼引来則須下使二甘一食一而後浮

取上不レ然而即一時浮取則其習不レ可レ棄矣

凡鷹不レ使而坐一養肥一安則懐二凌一雲之志一矣

雖二二一三一日一坐一養鷹須二朝一昏拳レ之使二其柔順一」八オ

後放レ之爲レ妙○初放二于多レ樹處一

凡鷹小一食無レ害因二多一食一而生レ病但瘦一鷹小

食則加レ瘦矣且勿レ食脚一力一食(13ウ)二脚力一則成二霜

角及吾一叱邪一臥一矣鷹多一放内一熱日一常食レ半

下後夜一必勸レ水

二一月以一後十一月以一前陽一気盛一長不レ可二當レ午

放使一冬則可レ服二温一食一春一秋則不レ可レ服二温一食一

常使二水一食一爲レ妙雖二雪一上一無レ風日一煖則終日

放使爲レ妙

不レ幸両レ鷹相レ捉母レ下以二他レ術一救レ之両レ鷹之項」八ウ(14)

一レ時堅執則自レ然而解

冬レ月因二雨レ雪一或因レ執二雉于雪レ水一鷹羽濕而

凍即坐二レ照陽地一且無レ烟細レ火盛レ器置二於外レ

地一以レ鷹遠拳而照レ之又以レ手照レ火捫レ鷹則

其羽可二速一乾一也

肥レ鷹性レ悪内レ陋毎飼二水レ食一連服布レ■塊耶而

朝レ昏拳レ持則肌浮レ柔性レ順之矣

鷹偸レ食則上レ肌内レ陋盡下二其食一而後水レ食

二レ三レ點及レ■塊耶多少量宜レ服レ之朝レ昏拳レ持

適飢而後放レ之」九オ

痩鷹上レ肌法

痩レ鷹以二乳レ汁一和レ食飼レ之又温レ食數レ々飼レ之

半レ食可也下レ粮雖レ盈上レ粮空レ則又飼レ之矣

自二捉レ雉與二射雉中一新レ雉一則皆温レ食

凡鷹之内ニ陋皆以羽ニ塊一耶治レ之又以人ニ尿一
和食飼レ之

作食法　朝則半ニ食夕則大ニ鷹大ニ雉脚
小ニ鷹小ニ雉脚是適中也半食
謂雉半
脚量一也

作食人須先洗レ手執作一當細ニ長ニ而勿レ麁大
若有乾處必去之又去下皮ニ腓間如鼻ニ汁一不一ニ九ウ
淨之物上又去皮與レ油而後又用雉羽一磨肉
上醜ニ物去脚ニ力一以レ刀亂裂沉冷ニ水一淨洗飼
レ之食之多ニ少量ニ鷹之大ニ小一適ニ中飼レ之

坐レ鷹處法

常坐下寒ニ温適ニ中無烟ニ気一淨廳上爲レ可冬ニ月極
寒則常坐ニ温ニ處一不レ妨又冬ニ日坐ニ陽ニ處一然肥ニ
鷹則雖ニ冬月不レ許當陽坐レ之春ニ秋坐ニ陰ニ地一
鷹甚悪ニ烟ニ気一糠ニ烟尤ニ毒養レ鷹之家々ニ内及

近〻地勿レ焼二糠火一此鷹病之所二由生一也

想ー鷹安ー否法[15]一〇オ

凡鷹坐レ架強拂レ羽収二一ー足一宿則回レ頭而挿二左ー右一伸レ気屎則一ー日二ー三ー度所レ屎大如レ掌

黒ー白相ー離肩背羽不レ動食俗上則柔ー軟下

則堅ー硬肛ー門窄小而冷常食速下此是平

安之候也

聞ー見經験方

鷹有二足傷ー破浮ー腫一須レ安二ー坐暗ー寂処一或以レ醋和レ墨塗二傷処一又以二善養一令レ不レ驚ー動一則計日而差○鷹之頂勒[17]有二三ー四ー種一或促ー息或有レ涙或如レ人之疥瘡一而毀或兩肩垂下或一一〇ウ

兩ー足浮腫[18]皆頂勒之也皆以二川ー中小螺一去

皮肉ー片裏飼レ之二ー三ー度即差○鼻ー頂ー勒

鼻ー上凹處針ー灸且鼻邊毛ー呈■以二墨ー絲一貫レ針

貫ー刺又以レ艾灸二之両ー邊針ー孔一

喘ニ促鼻有レ聲者　曰ニ鼻ニ頂ニ勒一目有レ涙而眇ニ者
曰ニ目ニ頂ニ勒一両ニ翼垂ニ下者　曰ニ翼ニ頂ニ勒一身有レ如ニ
疥瘡一者　曰ニ身ニ頂ニ勒一足ニ腫者　曰ニ足ニ頂ニ勒一有ニ此ノ
證一者　坐ニ于無レ烟暗ニ寂處一不レ使ニ驚ニ動一且以ニ好ニ
食一善養　亦以ニ川ニ中小ニ螺一去レ皮裹レ肉飼レ之則
無ニ不レ愈者一足ニ頂ニ勒川ニ中冷ニ沙盛ニ於瓢ニ子一安ニ一一オ
於缸ニ上一以ニ病ニ鷹一坐ニ於冷沙上一過ニ一回五ニ夜一若
不レ差以レ愈為レ度連ニ夜坐レ之甚良　○鷹病
皆畏レ人怯ニ労煩ニ熱内ニ渇而出山ニ間溪ニ水有
レ虫名曰ニ下子一也只四ニ五ニ箇肉ニ片裹飼レ之神
效再ニ服亦可又黄ニ檗木實細ニ末肉ニ片裹飼
レ之　○鷹或多放或遠ニ路拳来身ニ労屎中
黒點不塊以馬糞水和レ食飼レ之
霜角鷹不ニ大ニ発一之時喘ニ息自ニ若又貪捉レ雉
粗知ニ鷹理一者不レ知ニ此ニ病之生一如レ常而放甚
不ニ可也此病者内ニ冷外ニ熱而出一可レ知ニ此ニ病一一一ウ

之出一也當一初始発一之時放一屎不レ長而断一絶
不レ能二放一屎一當レ如レ此則須下捉二生一雉一以二病鷹一多
噬二熱一血熱一肉・飼半一食上如レ此三一四一度使鷹内
熱一則可二能治一之須飼二熱一血一可之也若不レ捉二生
雉・須二雀鼠中生一捉噬レ之熱一血熱一肉甚可之
○上レ木不レ下(19)鷹呼引一来甘一食時肉一片二一三
■
點和二人一屎一飼レ之其習永一棄矣
凡鷹無レ病而日一漸消一瘦者必是針毎也只
虫所レ侵也採二取苦一参一根一取二水一一盆一煎至二半
■
盆一待レ冷鷹子縛置右水塗擦以二全一體盡一濕一」一二オ
爲レ限坐レ架待レ乾須下於二坐一架下一鋪油一席一験中一看
右一虫死一否上○鷹翅虫損苦一参一根煎レ水翅一
根當二損一處一塗一擦使レ之潰一濕一則計レ日而差生
レ羽如レ常
凡鷹或累一日或六一七一日専不レ食若勧レ食則
退走不レ顧者是必身一労煩一渇所レ致レ生レ病也

鷹若見レ水欲レ飲先勧二葉ー枝茶ー水一継勧二月ー経ー
水ヲ鷹若嗜シタシナム時ハレ食ヲ則不レ拘レ時雖レ嗜トモタシナムニ飲水一忌レ食ニ如ナラハ
レ前ノ須ク下ヘチ捉ケルヘチニ生ヲ雀ト飼フヲ之ヲ雖トモレ不ト貪ラレ食ヲ一二ー点ツイハミー食フ時ハ
則ケル生ヲ雀連ー續ニイキナカラ生ー捉トラヘカケテ係ニ坐ー架上ノニ鷹ノ有ラハニ食ノ心一則チ」一二ウ
自ニシメ然ル而食フ其ノ一病ー即チイユ差
凡ソ鷹ノ満リニ身ニカイサウノ疥瘡ノ一者ハ身ー頂ー勒之也ホニウノ哺乳ノ小ー兒黄ー
糞フンヲマセテ和レ水ニカイ搅レ之ヲ細ー布ニシメフルヒ篩レ之ヲ以テ竹ー筒ヲ一納ー于鷹ノ口
中ニ一以テ二食ヲ食ユ充ウクロシウマンスルヲ一為レ限トソ一キクタスコト一ー二ー度即チイユ差
凡ソ鷹多ク放トキハ雖トモレ無シト病ー證ー放ー鷹ノ者モノ意ニオモヘラク謂ヒテ多ー放ー以テ
レ病ヲ為ストレ嫌キラフコトヲ則肉ー庁ー二ー三ー点ー和マセテ二月ー経ケイー水ニ一飼ハ時ハレ之ヲ則
病不レ生トモレ雖ト不ニ多ー放ー鷹ハ是レ熱ー物用テレ心ヲ内ー渇カツス須クヘンニ
初ー夜一ー二ー更ノ中ニスムム勧ヤムレ水ヲ以テ二鷹不ルヲレ飲ヲ為レ限トヤムレ而止
凡ソ鷹ー鶻ノウチニ尿ラハ有ニ長ー虫カヤノ一櫪ー子ミ細ー末シメニクツ肉ヘハ裹ミ飼レ之ヲ然モ
差イユ有ラハレ毒トクラウ狼ゲー牙ー草シメ煎レ水ニアセテ和レ食ニフ飼レ之ヲ肉ー片ー三」一三オ
点ソ、セイミツニテ裹ー清セイミツニテ蜜フ飼レ之ヲ則チ長ー虫クス盡モ死スノ此ー薬モ尤之モ妙
凡ソ鷹ー遠ー路ヨリ拳シ来ル時ハ身ー労煩ー熱タリ似レ無キニ二病ー證ー粗ホマ知ルニ

鷹ノ理ヲ者以爲無レ病放ホシイマヽニ使フ時ハ則病死丁ステイ(20)ネイニ寧慎シンチ勿レ二放ニ使フコト須ヘシ二坐スエ養カツテヤシム休キヲ気十餘チ日ノ後更フケチ調放チ使フ為ス妙ヨシトレ

八ヤ九ヤ十ヤ月ノ間鷂ヤ子體ノ大サキ如レ鷹者ノモチロンハシメテ羅アミスル時ハ山ニ陳羅ソラネアミシ取トルレ勿レ二急ヤ速ニ拳ヤ持スルコト須ヲ下於テ二寒ヤ煖タンテキ適ヤ中ノ處ニ坐スエヤ養カツテ往ヤ々ニ拳ヤ持ス上アタツテ方ヲ二夏ヤ節ニ毛ヤ羽落ルヤ時遅ニシメ緩ニシメ不ンハ落レ須ク下カウノヒナトラヘシメ鶴ノ雛ヲ捉ル下シメ一ヤ二ヤ日ノ飼フ之ヲ則毛ヤ羽ヤ一ヤ時ニ盡クツ落レ鷹ノ羽不ンハ落レ亦カウフ食ヲ爲レ妙ナリ　且ヨウトハ鷂カウ與レ鶴ナ皆ニシメ熱ヤ物ニシメ而」一三ウ時(21)ヤ又極ノニ熱ヤ鷂ヤ子ヨウスルコト浴レ水ノニ一ヤ日ノ内ニ須ク二四ヤ五ヤ度ナル冷ヤ水シメキウス改ヲ給ヲ羽ヤ衣ヤ雖ヘレ未ト(22)カナハ称レ節ニトシメテ趣ニ孟ヤ秋ヲ須ク拳ヘレ之ヲ漸ヤ々ヤ盡ヤ夜ヤ不ンハ離レ手ヲ調ヤ習シメル時ハ不ンハ厭イトハレ人ヲ則初(23)テ引ヤ食フコト自ノ■近チ而ニ呼ヲ日ヤ漸ク遠ヤ引ヤ々ヤ食フ時ハ則チ以テ二初ヤ肱ノ児ヤ鷂ノ雌ヨウノ雄ヲ相ヤ間マジハテ爲レ食ヲ飛ヤ引テ飼ヲ而テ教ユレ之ヲ熱ヤ調ノ後朝ヤ暮乗シメ二涼ヤ気ニ拳ヤ持ル歸モトシメ早ヤ粟ソク田ヤ頭ニタツネ尋モトシメ二覓ヤ児ヤ雉ヲ放ツレ之ヲ得トルコトヲ時ハ捉ル則チ勿レ二急ヤ速ヤ直ヤ進スルコト作ヲ聲ヲ呼テレ之ヲ須ク下待テ二甘ヤ食ヲ一而ニ進ム上飼チ二半ヤ食ヤ餘ハカリヲ許ヤ一後ニ浮ヤ二ヤ取シメ児ヤ雉ヲ慣クワンヲ熱スヤ々ヤ捉ル時ハ

則雖二冬一節春一時一雌一雉皆可レ捉也鷂子放一使
之時須レ使二下一粮■亘盈一不レ尓則生レ病且熟一調一一四オ
放一使 則只於二朝一夕一拳一持 放使 不レ妨 然 性一悪
則不レ拘二此法一鷂一子初 捉 則畏レ人怯一労内一熱
煩一渇之心未レ殄加之以二寒一凍一下一肌拳一持急一
速調 放 則必一死丁一寧粗知二鷹一理一者不レ知二調一
養之法一反謂レ易レ斃惑之甚 矣當如二上法一調一
養 教一放 則多壽不レ病矣凡用レ薬放一教諸一法
與レ鷹同 籠奪與レ鶻同

鷹賦

惟 茲禽之化一育実二鍾山之所レ生 資二金一方之
猛一気一檀二火一徳之炎一精一何虞一者之多一端 運二横一一四ウ
羅 以 羈一束綴二經一絲於雙一瞼一結二長一縄於両一足
飛 不レ遂二於本一情一食 不レ充二於所レ欲 逸一翰由而
暫 歛 雄一心為レ之自局若乃貌非レ不一 相 乃
多一途 指 重二十一字一尾貴二合一盧一立 如二植一木一望 似二

愁レ胡觜同ニ鈎利一脚等ニ荊枯一亦有下白如ニ散レ花一
赤如中點レ血一大レ文若レ錦細レ斑似レ纈眼類ニ明レ珠一
毛猶ニ霜レ雪身レ重若レ金爪レ剋如レ鐵或復頂レ平
似レ削頭レ圓如レ卯臆レ濶頸レ長筋レ麁脛レ短翅レ厚
羽レ勁睟レ寛肉レ緩此之才レ用俱爲ニ絶レ伴一或如ニ
鶉レ頭一或似ニ鴟レ首一赤レ晴黄レ足細レ骨小レ肘懶而」一五オ
易レ驚奸而難レ誘住不レ可レ呼飛不レ及レ走若レ斯
之輩不レ如レ勿レ有若レ夫疾レ食速レ消此レ則有レ命
鴛レ頸猴立是為レ無レ病厠レ門忌レ大結レ肛悪レ軟
條不レ欲レ絶背不レ宣レ喘生ニ於窟一者則好レ眠生ニ
於木一者則常立雙レ骸長者則起遅六レ翮短
者則飛レ急毛レ衣屢レ改厥色無レ常寅生酉就
捻號爲レ黄二レ周作レ鵝千レ日成レ蒼雖レ曰ニ排廬一
性殊ニ衆レ鳥一雌則體大雄則體小遇レ犬則驚
猜見レ人則馴擾養レ雛則小病野羅則多レ巧
察レ之爲レ易調レ之實難格必高レ逈室必華レ寛」一五ウ

蕈以取レ熱酒以排レ寒韝須二温レ暖一肉不二陳レ乾一
近レ之令レ狎静レ之使レ安晝不レ離レ手夜便火レ宿
徴加二其毛一小減二其肉一肌レ肥腸レ痩心レ和性レ霊
念絶二雲レ霄一志在二馳レ逐一（般者腔也格者架也黄者今之甫羅也鵜者今ノ之求真也）

右古本鷹鶻方雖多不審依无類本
不能校合只任本書訖　　通尭」一六オ

彰考舘御本奥書

右レ者以二山レ本藤レ右レ衞レ門所持本一令二書寫
校レ合一畢　兼應三甲午年六月六日

古本鷹鶻方以二水戸彰考舘御本書寫
之一天保四年五月廿六日
史舘待命　平小山田　與清」一六ウ

右此一帖者以二平與清小山田将曹自筆
本ヲ一於東武邸（テイ）舎手自下（ミノカラ）翰（カンヲ）書二一寫之一畢
天一保四年歳次癸巳（キシニ）仲秋下澣日
正木治部越智宿禰通尭
（花押）」一七オ

右古本鷹鶻方者以正木通尭手書本騰
寫畢天保四癸巳之秋九月廿八日起筆
十月五日終巻馴鷹繋務之間連夜務下
採毫成功畢通尭者近江彦根之家士也
善國学側耽探鷹書頃日奉主命来江戸
舘而勤仕余有邂逅者而交情密也固得
借此書寫焉
雑司谷鷹人　片山勇八賢（花押）」一七ウ

注

（1）正統ハ明ノ英宗ノ
年号之十四年ッ、
ク日本永享九年
ヨリ嘉吉文安宝徳
ノ間ニアタル凡四百年
ハカリニナル

（2）○草州湯杻州二字皆謬也
當ニ作レ州ニ草州則未レ詳ニ何
物一自レ前以二黄栢實一搏
碎作レ湯称二草州湯一治ス二
鷹虱ヲ一黄一栢即今郷一
菜用レ皮黄一栢一木也

（3）○梨蔞根即秸蔞根
到處有レ之我國郷菜
也栢部根ノ栢ハ當レ作レ百
乃唐材也

（4）○狼牙草。俗ニ名二草鞋
菜一到處有レ之

（5）一本礬作レ反カヘラス

（6）一本身作鼻

（7）一本百作等

（8）胡黄之間ニ麻ノ字
脱スル歟

(9) 疑凝誤カ亦
下ノ内當作肉
(10) 省肖誤乎
(11) 一本際作熱
(12) 食二間若飼文字
脱スル歟
(13) 一本力字二字トモ
作筋
(14) 一本項作頂
(15) 想相誤歟
(16) 屎槀誤歟
(17) 一本頂作項
(18) 皆頂ノ間ニ足ノ字
ヲ脱スルナルヘシ
(19) 一本下作可誤也
(20) 一本丁作下
(21) 而時之間ニ若シ
夏ノ字ナト脱セ
シニハアラヌカ
(22) 一本未作末
(23) 初引ノ間ニ呼字
脱スルカ可考
(24) 一本丁作下誤カ

〔付記〕
本稿は、科学研究費補助金（基盤研究C、課題番号 24520247、研究課題名「放鷹文化と鷹書類の研究」、研究代表者 中本大）、生き物文化誌学会助成制度「さくら基金」による研究成果の一部である。

〈キーワード〉鷹狩り、韓国の鷹書、鷹鶻方

The Whole Sentence of the Text of Falconry Called "Yo-kotsu-ho" which National Library of Korea Owns

Yasuko NIHONMATSU

The whole sentence introduces a text of the falconry called "Yo-kotsu-ho" which National Library of Korea owns. This text was established in Korea in the 15th century. An author is 안평대군(安平大君)이용(李瑢). The point that is particularly important about this text is a sentence to see so that a written statement of expert opinion comes. I understand what kind of people read this text by this sentence in Japan. Furthermore, I can guess how falconry culture in Japan unfolded from the information. Therefore I think that the important clue that Japan and interchange of the Korean falconry culture become clear is provided when I introduce the whole sentence of this text.